

群馬・二之宮宮東遺跡

1 所在地 群馬県前橋市二之宮町

2 調査期間 一九八五年(昭和60)十一月～一九八六年一〇月

3 発掘機関 群馬県埋蔵文化財調査事業団

4 調査担当者 桜場一寿・坂井 隆・山口逸弘ほか

5 遺跡の種類 寺院跡・居館跡・集落跡

6 遺跡の年代 九世紀～一八世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

二之宮宮東遺跡は、前橋市の市街地東の赤城山南麓で、利根川支流荒砥川扇状地の末端に位置する。



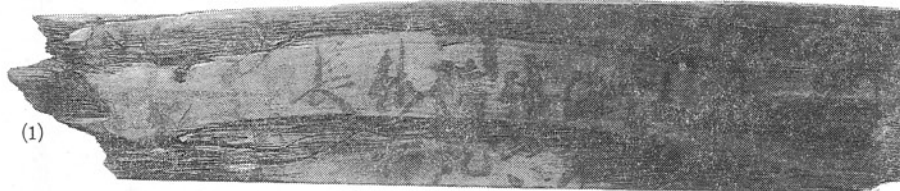
(前橋)

調査地の西北西三〇〇mに古代以来の二之宮赤城神社が鎮座し、土塁で囲まれた同神社の北側には、一二世紀初頭に築造された中世東山道地域の主要幹線道路「あづま道」が東西に走っている。
調査地のすぐ北に、真言

宗豊山派の無量寿寺がある。この寺は中世には赤城神社に関係する武士団の居館であったが、近世には前橋藩主と関係のある寺院に変わった。寺伝では元禄年間に護持院隆光により中興されたと言われる。

調査地に北接して、一辺一〇m、高さ七mの方形の塚である筑波山がある。この塚の南に、東西約八五m、南北約二〇m、深さ三mの長方形の池跡X〇一一遺構が検出された。池内には、筑波山のすぐ南に中島が、そして東には橋跡が見られた。もともと中世居館の堀の区画を利用して一七世紀初頭に築造され、一七世紀末頃に前記施設と筑波山を含めた無量寿寺の庭園として増築されている。さらに一八世紀中ごろ以降、池は灌漑用水池として、また筑波山と中島は村内の庚申信仰の拠点として、役割を変化させた。

この中島周辺の池底から近世の墨書板一点・杭型塔婆一六点、また近代の祭礼板二点が出土した。文字資料としては他に「〇ヤ」と墨書された備前摺鉢、寛永通宝、庚申塔七基



(1)

止めの部分で、「延享三年」（一七四六）の紀年銘が判読できる。

他に杭型塔婆一〇点、板塔婆二点があるが判読できない。いずれも(5)と近い年代と考えられる。

9 関係文献

勸群馬県埋蔵文化財調査事業団『二之宮宮東遺跡発掘調査報告書』（一九九三年）

（坂井 隆・高島英之）

